Ａｐｒ　２０１５　Ｎｏ．４８

大垣市金生山化石館

# 化石館だより

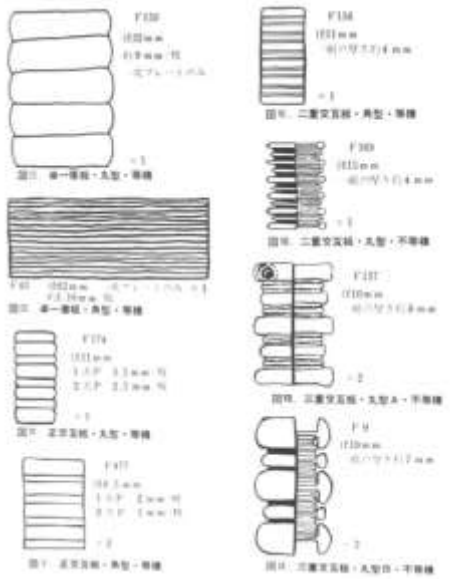
コラム

## ウミユリの森

金生山化石館に入ると、木枠ケースに入った大きな石灰岩が展示してあるのに気づきます。この石はいわゆるウミユリ石灰岩と言われるもので、ウミユリの遺骸が無数に集積して固まり石灰岩となったものです。ウミユリという生物は、棘皮動物に属しており、ウニやヒトデの仲間です。ユリという名から植物を連想される方も多いのですが、浮遊物を捕えて食べる動物なのです。約２億５千万年前、金生山の石灰岩が堆積した頃には、ウミユリの仲間が浅い海に大繁栄していました。このウミユリの仲間の一部は、古生代末に生じた大量大絶滅を生き抜いて命をつなぎ今も生き残っています。駿河湾では１００ｍを超える深海にトリノアシというウミユリの一種が生息しています。海底から１本の茎を伸ばし、その先端につく萼から、ユリの花に似た腕を丸く大きく広げて浮遊物が流れてくるのを待ち受けている様は、まるで３億年近く前のウミユリの姿を見ているように思えます。

展示してある石灰岩に近づいてよく観察すると、石の表面にウミユリの茎がたくさん浮き出ているのに気づきます。この石灰岩は、化石館の東側の道を２００ｍ程北に登った辺りで採取されました。その辺りは「紅縞帯」と名付けられた赤坂石灰岩の下部層に相当する石灰岩帯で、ウミユリやサンゴ、腕足類の化石を豊富に含んでいました。現在この部分は深く掘り下げられ、赤土によって埋め戻されていますが、採掘が始まる前は、足元に露出する石灰岩には、風化したウミユリ化石がびっしりと浮き出ており、赤土まみれの石を掘り出して洗えば、簡単にウミユリ化石が採取できたのです。金生山化石館に展示してあるウミユリ化石のほとんどはこの場所から採取されています。

金生山のウミユリ化石は、母岩との分離が良くないので、石灰岩をたたき割っても茎の断面しか観察できませんが、表土の中から採取されたウミユリ化石は、長い年月をかけて風化されており、ウミユリの姿が立体的に浮き出ています。江戸時代にはこのようなウミユリ化石に「銭石」とか「百足石（ムカデイシ)」という名が付けられていたそうですが、茎板という円盤状の骨片が多数連結して茎を形成している様は、紐でたくさんの銭を連ねたように見えます。また、中心となる太い茎から”根”と呼ばれる細い枝がたくさん出ている様は百足を連想させます。いずれもうまく名付けたものだと感心させられます。



金生山化石館に展示してあるウミユリ化石をていねいに観察していくと、ウミユリにも多くの種類があることに気づきます。茎の太さは１cmに満たない細いものから、数cmもある太いものまで様々で、最も太い茎は直径が８cmもあり、長さは１m近くあるものが発見されています。また、円盤状の茎板には分厚いものや薄いものがあり、その重なり方も薄いものと分厚いものが交互に重なったりするなど変化に富んでいます。さらに”根”の付き方や数にもさまざまな違いが見られます。また金生山ではごく僅かしか出てきませんが、円盤状ではなく五角形をした茎板も見つかります。ウミユリは死後すぐに分解してしまい、全体の姿を留めることは稀で、金生山のウミユリは種の分類にまで至っていませんが、何種類ものウミユリの仲間が共存していたことは確かです。

２億５千万年前、ウミユリの生活した浅い海はどんな様子だったのでしょう。大量のウミユリ化石が密集していることから、かなり高密度で生息していたことが伺えます。茎の太さはウミユリの背丈と関連すると思われます。太いものは背丈も高かったのでしょう。背丈を高くするためには、茎を太くして水流に耐える必要があったのかもしれません。ウミユリは茎の先端にある腕を広げて浮遊物を捕えていますが、背丈を変えることにより捕食域を分け合って生活していたのかもしれません。ウミユリの生活した浅い海には、みごとなウミユリの森が広がっていたのかもしれませんね。

## ◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆　お 知 ら せ　◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

## 「金生山化石調査報告書(2012-2013)」

金生山化石研究会による、「金生山化石調査報告書（2012-2013 年)」ができました。この調査は、大垣市の委託により金生山の最上部層の分布域とフズリナ・有孔虫の生層序について調べたものです。

販売はしていませんので必要な方は化石館へご連絡ください。残部があれば提供いたします。

問い合わせ：　大垣市金生山化石館　　電話　（0584）71-0950　（ファックスも同じ）
Email　kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp